沖津宮現地大祭

晴天の中、約二六〇名が渡島参拝

宗像大社沖津宮の現地大祭が、五月二十七日沖ノ島で斎行された。初夏の潮の香漂い、新緑に包まれるこの日本海海戦の記念日を卜して年に一度だけ一般参拝者の渡島が許される。

三月下旬より、全国から申し込みをされた方々の中から、厳正に選定された約二六〇名の参拝者は、前日の二十六日に筑前大島に参集。中津宮社務所で受付を済ませ、午後六時から斎行の渡島安全祈願祭に参列し、翌日の無事の渡島を祈念した。

祭典後、高向権宮司より現地大祭の意義、葦津禰宜からは渡航に際しての総括説明が行われた。その後参拝者は各班に分かれ、担当引率神職より諸注意があり解散、各自大島の宿に参籠した。

当日は、晴天に恵まれた上、海上模様も穏

写真／朝日新聞社提供

宗像

遷宮で 結ぶ人の輪 心の輪

第六十二回神宮式年遷宮

7月祭事暦

毎月1・15日 月次祭（つきなみ）
午前10時～
高宮祭
第二宮・第三宮祭
宗像護国神社祭（1日）
午前11時～
総社祭
浦安舞奉奏（1日）
豊栄舞奉奏（15日）

28日 午前9時～
第53回中津宮七夕揮毫会
於＝筑前大島 中津宮

31日 午後5時～
夏越の大祓神事
大祓式 於＝神門前
夏越祭（引き続き） 於＝本殿

原滴

宗像大社の境内に足を踏み入れると池があり、参拝者の心を和ませている。一般的には神社境内の池を心字池と称し、神前へ進む前に、池面に映る己の姿を目にし、身なりを整え、心身を清める禊・祓の役割を担っているとも言われる▼昨今この心字池に、現代の地球環境を物語る現象がおきている。優雅に泳ぐ錦鯉にとって、生息困難な場所となりつつあるのであるのだ。いくつかの理由が挙げられるが、最大の原因は大気汚染に起因する酸性雨とのこと。化学物質を含む雨水が、池や川、土壌などの自然環境を汚し、生息する動植物に影響を及ぼしている▼自然との共生を連綿と継承してきた神社にも、その兆候が現れたのである。環境悪化の根本要因は便利さの追求、つまり我々の欲にある。人類が進歩の名のもとに環境破壊を重ね、自然の治癒力を奪い続ける限り、地球はどんどん病んでいく▼森林浴或いはトレッキングなど自然と触れ合うことにより、人々は癒しを感じ、心を洗われるという。であるならば都会であればあるほど、一番身近な自然との共生を感じることができるのは、「鎮守の杜」ではないだろうか。神社へ参拝された折には、神への感謝、祈願と共に自然への畏敬をも是非心に刻んで頂きたいものである。（葦）

神具・装束・授与品 井筒
装束店（福岡店） 〒812-0068福岡市東区社領1-12-10-401 フリーダイヤル 0120-055-092 電話 092-651-9456
授与品店（本店） 〒601-8348京都市南区吉祥院観音堂町23 フリーダイヤル 0120-075-820 電話 075-672-8100

木組の家 匠の技
総合建築業 株式会社 弘江組
〒811-3406福岡県宗像市稲元1025 電話(0940)32-2567

やかで参列者は午前七時三十分大島渡船「しおかぜ」、海上タクシー「宝栄丸」、チャーター船の「第三宝栄丸」「恵比寿丸」「恵比寿丸Ⅱ」「アクアシャイン」の各船に乗船。家族・関係者の見送り受けながら出港、一路沖ノ島を目指した。

午前九時頃、全船沖ノ島に着島、一同は直ちに海で禊を行い、心身共に清めて、島の中腹に鎮まる御本殿へと樹林の生い茂る四百段に及ぶ参道を進んだ。

午前九時半、沖津宮現地大祭斎行。御神前には全国各地の参拝者から御神酒・奉献品がお供えされ、高向権宮司が日本海海戦を顧みて国家・皇室の安泰、参列者を始めとして国民の平穏を祈る祝詞を奏上。続いて権宮司以下各代表者が順次玉串を奉奠、敬虔な祈りの中祭典は滞りなく終了した。

その後、波止場で沖・中両宮奉賛会、同翼賛会の皆様により調理された刺身、煮魚、その煮汁でいただくソーメンに一同舌鼓を打ちながら、神の島での一時を過ごした。

正午過ぎ、参拝者は各船に乗り込み沖ノ島を離島、ゆっくりと島を一周し午後二時過ぎには全船が大島に到着、参拝者はその場で解散となりそれぞれ帰路についた。

一方、沖ノ島に渡島出来ない女性・子供は、大島の「沖津宮遥拝所」の祭典に参列し、遥か沖ノ島に祈りを捧げた。

また今回も各報道機関の取材は勿論の事、多くの学術関係者や作家の夢枕獏氏・漫画家のうえやまとち氏など著名人の御参列もあり、沖ノ島とこの祭典についていよいよ広く知られてきた観がする。

沖ノ島上陸後の禊　写真／朝日新聞社提供

前日の大島・中津宮での説明会　写真／朝日新聞社提供

祭典後の遺跡説明

直会に向けて魚を準備する大島の漁師さんら

参拝された漫画家の「うえやまとち」さん

大島・中津宮で受付される参拝者

祝詞を奉上する高向権宮司

平成二十年度 氏子会総代総会開催

五月十九日、本年度第一回目の氏子会総代総会が、安部照生会長以下一〇九名出席の下清明殿で開催された。

まず、村田副会長より開会の辞があり、引き続いて神宮並皇居遥拝、国歌斉唱、敬神生活の綱領を一同唱和し、会長・宮司挨拶の後、議事へと入った。

安部会長が議長に選出されて議事の審議に入り、事務局より平成十九年度氏子会事業報告また決算報告がなされ、城野監事より会計監査を厳正に行い決算報告に相違ないことが述べられ、全会一致で承認された。次に平成二十年度氏子会事業計画案・予算案について事務局より説明され、こちらも全会一致にて承認された。

次に、宗像大社の由緒と氏子会組織の成り立ちについて事務局より説明させて頂き、氏子会費取りまとめについて総代皆様に御理解と御協力のお願いがなされた。

また、本年で第十七回目となる氏子会研修旅行の件について説明があり、多数の皆様の参加を呼びかけた。

最後に、本年度より総代・評議員に新たに御就任頂いた方々への委嘱状伝達式が行われ、該当者を代表して田島地区五月ヶ丘の評議員・中村広中氏に委嘱状が手渡され、最後に大島副会長より閉会の辞があり総会は閉会した。

本年度より新たに御就任頂きました新役員、総代・評議員の皆様には今後の大社の諸行事・祭典等への御協力をお願い申し上げますと共に、引続き総代・評議員をお引受け頂いた方々にも更なるお力添えをお願い申し上げます。

平成二十年度 氏子青年会総会開催

六月三日宗像大社氏子青年会（小林栄二会長）の総会が当大社斎館で開催された。

総会は、田中郁三理事を議長に選出し、議事審議に入った。事務局より平成十九年度事業・決算報告並びに磯部輝美監事より決算監査報告が行われ、全員一致で承認された。次に、今年度役員選出の件、引き続き平成二十年度事業計画案・予算案を事務局より提案、こちらも全員一致で承認された。次に新会員の紹介が行われ、総会は滞り無く終了した。

当大社を中心とした神郡宗像の発展と、誇りある我が国の伝統を次世代へと伝えるべく結成された宗像大社氏子青年会も今年で四年目を迎えた。会員も五十七名を数え、昨年度は第一回研修旅行を行い、当大社の親神様にあたられます神宮に参拝。又、式年遷宮の勉強会を開く等、徐々にではあるがその活動の幅を拡げている。

安産・病気平癒御守が新しくなりました！

ウラ面

ウラ面

正月に新しくなった交通安全の肌守に続き、「安産守」「病気平癒」の肌守も意匠を一新しました。

日本で最初の交通安全御守である「水引守」を基にデザインした、交通安全肌守を継承し、当大社の象徴である「楢の葉」の御神紋と「雲」の模様で、とてもシンプルになっております。

現在、本殿と祈願殿各授与所で授与致しております。

沖ノ島鳥類調査報告

リュウキュウコノハズクを求めて

北九州市立自然史・歴史博物館
鳥類担当学芸員 武石全慈

コノハズクは全長約二〇センチの日本で一番小さいフクロウ類で、頭には羽角という耳のような羽があるいわゆるミミズクです。小さな体に似合わない大きな声で甲高く、「ブッ・キョッ・キョッ・キョー、ブッ・キョッ・キョー、…」と鳴きます。その鳴き声は昔から「仏法僧、仏法僧、…」と鳴くとされ、ブッポウソウという名の別の鳥がその声の主だと鎌倉時代から間違われてきました（間違いが訂正されたのは一九三五年）。

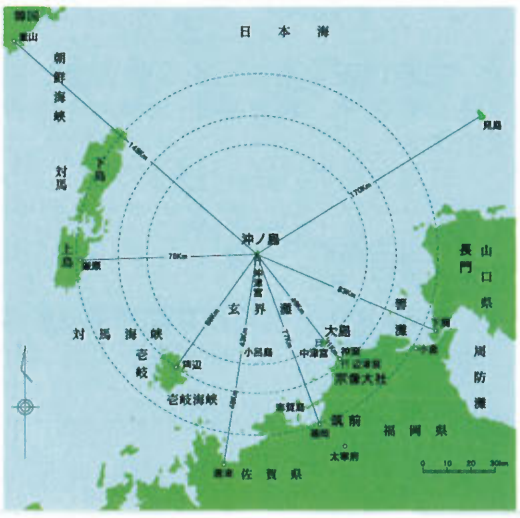
コノハズクは日本では夏鳥として北海道から九州までの山地で繁殖し、東南アジアで越冬します。でも奄美・沖縄などの南西諸島では一年中生息する留鳥です。しかも南西諸島のコノハズクは二センチほど大きく、鳴き声は「コ・ホー、コ・ホー、……」と穏やかな声で鳴き続けます。そのため、コノハズクという一つの種の中の地方的な変異をもつ集団（亜種）としてリュウキュウコノハズクという名前で呼ばれてきました。

ところが最近、リュウキュウコノハズクはコノハズクとは明らかに異なる別種であるとされました。その根拠は主に鳴き声と体の大きさによっています。世界的に見ると、日本本土のコノハズクはユーラシア又はアジアの大陸に分布する種と同種の「大陸のコノハズク類」ですが、リュウキュウコノハズクは南西諸島と台湾沖の蘭嶼（ランユー）という島とフィリピン北方のバタン諸島に分布する「島のコノハズク類」です。

さて沖ノ島では、一九七四年の北九州野鳥の会の調査によって、鳴き声に基づきリュウキュウコノハズクが四月末から八月初めにかけて生息すると指摘されました。その後も春夏季には鳴き声によってその存在が確認されてきました。しかし二〇〇〇年発行の日本鳥学会の日本鳥類目録では、リュウキュウコノハズクの繁殖分布の北限は奄美大島で、沖ノ島での生息は学術的には認められていません。最近では、より北のトカラ列島の中之島が繁殖分布の北限とされています。沖ノ島では春夏季に鳴き声が聞かれるので、繁殖している可能性は大きいのですが、繁殖確認はされていません。そんな点も影響しているようです。

台湾の国立東華大学の許育誠準教授は、リュウキュウコノハズクの系統地理学的研究をしていて、中之島以南の分布域の主な島の個体を捕獲し、そのDNA解析から遺伝的な地理的変異を明らかにしてきました。しかし、中之島からバタン諸島までの直線距離約一、三〇〇キロに及ぶ（公認の）分布範囲に比べ、中之島から北へ約五〇〇キロも遠く離れた（未公認の）沖ノ島でのリュウキュウコノハズクの存在は、許準教授に非常な関心をもたらしたようです。許準教授から東京大学の樋口広芳教授を通じて私への調査協力の呼びかけがあり、そこで宗像大社から渡島許可を得るとともに、環境省から鳥類捕獲許可も得て、今年の六月五日～七日にかけて沖ノ島に渡って調査が行なわれました。調査者は、台湾からは許準教授と

捕獲されたリュウキュウコノハズク



簡哲仲助手の二名、日本側からは私と日本鳥類標識協会の武下雅文・岡部海都・小倉豪の三氏の計六名で、朝日新聞記者二名も同行しました。

二夜に渡って林内に入り、適宜にカスミ網を張って、その脇にはリュウキュウコノハズクのデコイをおいてレコーダーから鳴き声を流しました。するとすぐに、ナワバリに侵入者が入り込んだと思ってリュウキュウコノハズクが鳴きながら樹冠伝いに近づいてきました。通常はここでデコイとレコーダーの近くまで飛んできて、カスミ網に引っかかって捕獲できるのですが、沖ノ島の個体は攻撃性が弱いのか、樹冠部周辺を動きまわるだけで、なかなか地表近くへ飛んできてくれません。最初の夜は全く捕獲できませんでした。沖ノ島での捕獲は無理かと絶望的な雰囲気が支配していた二夜目の二十三時四〇分、一気に二羽が網にかかりました。鳴き声につられてやって来た二羽の雄が追いかけあいをして網にかかったようでした。二羽は網からはずされ、体の各部分の計測と、極く微量の血液の採取が行なわれ、環境省の標識用足環が装着された後、その場で放されました。結局、今回捕獲できたのはわずか二羽だけでした。それでも、鳴き声と体の特徴からリュウキュウコノハズクの生息が再度確認されました。また、採取された血液から今後DNA解析が行なわれ、沖ノ島の個体群の遺伝的特性が明らかになるでしょうし、沖ノ島が分布域の北限であることが学術的に定着していくことになるでしょう。

沖ノ島では宗教的な理由によって、みごとな原始的自然が保たれてきました。そのおかげで、分布域が非常に狭いリュウキュウコノハズクにとって、重要な生息地の一つとなってきたようです。これからも沖ノ島の原始的自然が未来永劫保たれていくことを願って止みません。終わりに今回の調査実施にご協力いただきました、宗像大社、環境省九州地方環境事務所、宗像市市民活動推進課の関係者の方々に対しまして御礼申し上げます。

カスミ網の近くにデコイを置き
レコーダーから鳴き声を流す

カスミ網からリュウキュウコノハズクをはずす簡助手

リュウキュウコノハズクに標識用足環を装着する
（左が許準教授、右は岡部氏）

調査参加者（前列右から２番目が許準教授、後列右端が筆者）

「神宝館」休館のお知らせ

宗像大社神宝館では展示替え作業のため、左記の日程で三日間休館します。

平成二十年
七月八日（火）～十日（木）
休館日

ご迷惑をおかけしますが、御理解の程宜しくお願い申し上げます。

宗像大社神宝館

第一回 鐘崎・漁師まつり開催

五月三十一日（土）、六月一日（日）の両日、第一回鐘崎漁師祭りが同漁港周囲で開催された。

このイベントは昨年まで「玄海さかな祭り」として催されていたが、本年より内容を改め鐘崎漁業協同組合の主催によりリニューアルされての開催となった。

両日ともに天候に恵まれ、会場では漁師さんによる鮮魚の直売、イベント広場ではステージショー、海産物販売、魚のつかみ取り大会などが行われ盛り上がりをみせた。

ステージイベントでは宗像大社に関するクイズが出されるなどして、鮮魚や宗像大社提供の景品なども振舞われた。

その他にも玄界灘ショートクルージングとして大島・地ノ島の周遊も行われ、家族連れには大変好評で、期間中約一五、〇〇〇人の来場者で盛り上がりを見せた。

第37回「宗像大社短歌大会」のご案内

●日　時＝平成20年11月22日（土）
小中高生の部／午前10:00～11:20
一般の部　　／午後12:20～16:00
●会　場　宗像大社「清明殿」（宗像市田島2331）
●応募方法
◆詠草…小中高生は1人1首。一般は1人2首まで可（未発表のもの厳守）。B4の400字詰め原稿用紙の右半分に楷書で作品（固有名詞など難読語にはふりがなを）、左半分に郵便番号・住所（マンション名も）・氏名（ふりがな）・年齢・電話番号を明記のこと。小中高生は学校・学年も明記のこと。
◆出詠料…1首1,000円（定額小為替にて。小中高生は無料）。
詠草集送付のための切手（50円切手2枚）を、作品と同封のこと。
◆締切日… 一般＝平成20年8月末日（当日消印有効）
小中高＝平成20年9月10日（当日消印有効）
◆送り先…〒811-4175　宗像市田久5-25-17
「宗像大社短歌大会」実行委員会事務局宛
「小」「中」「高」「一般」の別を朱書きのこと。
◆問合せ先…上記の送り先へ往復葉書で。
●選者
小中高生の部＝桜川冴子
一般の部＝青木昭子・桜川冴子・中西輝磨・野田光介（50音順）
※講演＝青木昭子　題目＝表現の多様性
●発表　平成20年11月22日（土）大会当日
選考結果送付希望の方は、90円切手を貼った返信用封筒を作品に同封して下さい。
●賞
小中高生の部＝宗像市長賞・宗像市教育委員会賞・宗像大社賞・毎日新聞社賞・入選
一般の部＝福岡県知事賞・福岡県教育委員会賞・宗像市長賞・宗像市教育委員会賞・毎日新聞社特別賞・宗像大社宮司賞・宗像大社氏子会賞・宗像大社賞・毎日新聞社賞・優秀賞
◆主催／「宗像大社短歌大会」実行委員会
◆共催／毎日新聞社
◆後援／福岡県・福岡県教育委員会・宗像市・宗像市教育委員会・宗像大社・宗像大社氏子会
・※応募によって得られた個人情報は、本大会以外のことに利用しません。

平成二十年度 夏越（なごし）の大祓神事 ご案内

恒例の夏越祭が近付いて参りました。このお祭りは、大祓神事を中心に行われ、夏季に流行する悪疫を除去し、皆様方の心身の罪・穢を人形に託して祓い除き、清々しい気持ちで、毎日を無事に過ごしていただくための祈りを込めた神事でございます。

本年も左記の通り斎行致しますので、皆様お誘い合わせの上御参拝下さいますよう御案内申し上げます。

◆日時
七月三十一日（木）午後五時～
◆場所
大祓（おおはらえ）神事 引き続き 夏越（なごし）祭斎行

(続) 浜の寄物

227

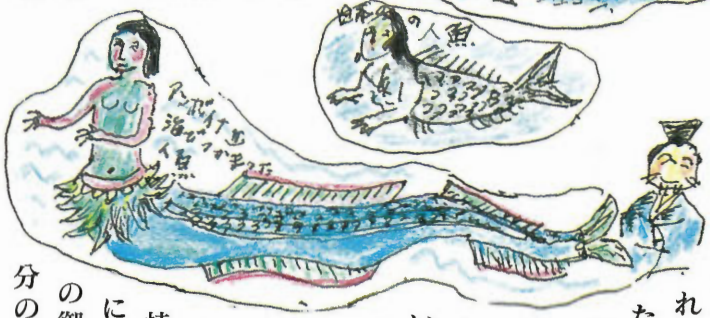
いしい ただし

五月二十四・二十五日と福井県・小浜市で、第二十七回全国地方研究者大会に参加した。基調講演は日本地名研究所所長の谷川健一氏で「若狭八百比丘尼伝説の誕生」であった。他に研究報告として、日本民俗学会の藤江久志氏の「八百比丘尼のあるいた道」が基調講演と結びつく内容であった。

八百比丘尼伝説は小浜の空印寺に比丘尼入定窟があり、観光名所にもなっている。

伝説は、小浜の勢村に高橋長者という富豪がいた。時々小浜の金持らと一緒に集まり宴を開いた。その中に海辺のものがいて、今度は自分が接待したいと言い、みんなで約束の場所に行った。その舟に乗って、海中を潜りながら進むと、ほどなく着いた。その住居は豪邸であった。客の一人が勝手の方をそっと覗いたら、料理しているのが見えた。人のような物を料理しているのだ。主人は炙物(あぶりもの)を出したが、招待客は食べなかった。別れ際に主人が云うには、今日一番の御馳走を出したが、食べていただけなくて残念でした。と言って炙物を一人ずつ土産にもたせた。帰りも舟に乗って、潜ってもと来た浜に着いた。土産の炙物は高橋長者の娘がこっそり食べた。以後娘は年をとることなく八百年生きた(拾椎(しゅうすい)雑話)海辺の者といったのは竜宮城の人で、炙物は人魚であった。

人魚はジュゴンで、沖縄ではザンノイオという。なかなか美味らしい。絶滅危惧種である。



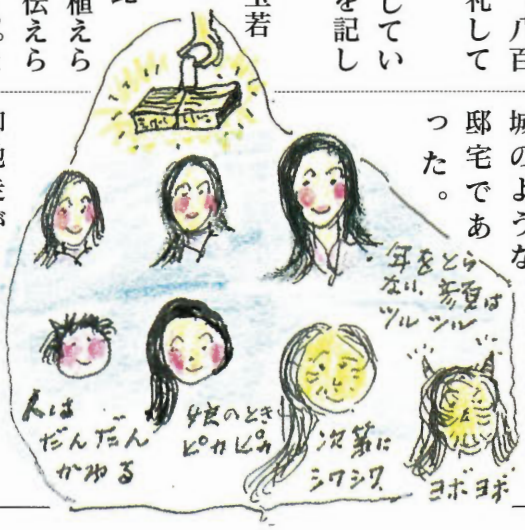
八百比丘尼にまつわる伝説は福島から熊本まで二十七都府県、一一五ケ所が知られ、入定地も十一県十七ケ所が知られている。

福岡県芦屋町山鹿にもあり、ここの八百比丘尼はホラガイを食べて、八〇〇年を生きている。

多くの伝説では若狭(現福井県)生れ、人魚を食べ、八百歳の長寿で、各地を巡礼していることである。

藤江氏は十例を紹介しているが、そのうちの四例を記してみる。

島根県・隠岐島では玉若酢命神社にある杉は高さ三十メートルの大杉で、八百杉といわれ、八百比丘尼がここに来た時に植えられたと伝えられている。また佐渡島(さどがしま)の伝説では、村人が海岸で酒盛りをしていると、通りかかった男が仲間入りをする。男は村人の持て成しに喜び、その御礼に、自分の所でしましょうと招待する。集まった村人を一人ずつ目隠しして背負ってつれていく。そこは竜宮城のような邸宅であった。



御馳走が振るまわれ、仲間の一人が料理場を覗くと、人間の子のようなものを料理している。驚いて仲間に告げ早々と暇乞いをする。主人は大変別れを惜んで、その料理を菓包にして一人一人に土産に持ち帰らせた。また往きと同じようにして浜まで送ってくれた。村人達は貰った包みを海へ捨てたが、一人の爺さんだけが、忘れて家に持ち帰り、戸棚に入れてた。爺さんの娘が見つけて包を解いて食べてしまった。娘は八〇〇年生きたという。

第五六三回 宗像大社歌会詠草

大野展男選 毎月25日〆切

宗像市 田久 巻 桔梗

若者が出会ひを希ふ絵馬あまたあれば復つべし少子化日本

〔評〕少子化は国の根幹をゆるがす由由しき問題である。沢山の絵馬を見て多くのカップルが成立し出産してくれることを希ふ作者である。心深い目が生み出した一首。

宗像市 田久 井上 光

夜毎来て花食い荒らす蛞蝓(なめくじ)め見れば一寸されど許さじ

〔評〕蛞蝓めの「め」にこめられた怒り。一寸と言えば結構大きい。少々の花などひとたまりもないだろう。ナメクジキラーと言う薬があります。是非使って花の生命をまっとうさせて下さい。

北九州市 八幡西区 吉田ウト子

ふふみたる百合は門辺にささ揺れてわれより先に朝を出向ふ

〔評〕朝の目覚めの早い作者であろう。その作者より早く朝を迎える百合を、いつくしみ且つねたましく思う心情。出向ふは出迎ふ、が正しい。

宗像市 大島 杉田 禮子

病室に着けばうとうとする我に夫はベットを降りて茶を汲む

〔評〕入院の夫のみとりと留守宅を守る苦労に疲れた妻。それをいたわる夫。加齢した夫婦のかなしくもほほえましい状景である。二句は「来てうとうと」がいい。

うきは市 浮羽町 向 則正

窓の外楠と槻(けやき)がそそり立ち緑違へてわれに迫れる

〔評〕若葉→青葉→新緑→万緑等と呼ばれる初夏の木々のさまを詠っているが下句は「緑それぞれに我に迫りく」としたい。

宗像市 田野 森 甲子

秋月へ高速道を友とゆく若葉それぞれの山を愛でつつ

〔評〕春に芽吹いた木々が五月ごろ濃淡さまざまの新葉を拡げているさまは美しい。椎若葉、樫若葉、樺若葉など、それぞれの名を冠しいる程である。それを旅と共に楽しんでいる森さんである。

宗像市 東旭ヶ丘 天野 玲子

池の鯉来る度のぞけば丸々と太りているに我見る如し

〔評〕肥満は健康の敵か、丸々と太った鯉と我身とをくらべるのは女性ならでの嘆きであろう。面白い。

福津市 若木台 野間 精一

祖父祖母の手をふりほどき女童がファイトファイトと走り来たれり

〔評〕幼稚園の運動会風景だろうか。怪我を心配する祖父母の思惑は余所に運動会に熱中する溌剌たる女童である。

宗像市 光岡 森田富佐子

カラオケにリズム合わせてハミングす久々なので胸はどきどき

宗像市 光岡 則松 房子

チチと鳴き大空かけて乱舞する新緑の頃つばめの恋路

福岡市 南区 井田有久衣

嫋やかな藤の花咲く小春日に帰巣のつばめ頭上を翔び交う

北九州市 戸畑区 田中ハツセ

枯れしかと思ひし鉢に若葉萌ゆ萩に桔梗の花を浮かべる

福津市 中央 池浦千鶴子

花見むと近づくわれに気遣ふかカササギ一羽急に飛びたつ

福岡市 南区 加野シノブ

四川省山ゆるがする大地震学びの子らをのみし大地よ

選者詠

あこがれて受験計りし日もありき四本帆船日本丸見ゆ

（横浜・インターコンチネンホテル）

夕空の遠くに黒き富士浮ぶ神のとどけし贈物とも

紺青の運河のおもて十五階の窓下遅々と汽艇はすぐる

第五三八回 俳句作品集

宗像市 日の里 花田いつ枝

従兄弟らに上下はあらず夏座敷

編集後記

神社で最も参拝者が少ない時期は「夏」です。よって、まとまった期間の研修や各種大会、総会は全てこの時期に開催されます。「雅楽」や「祭式」等の技能を習得し自己研鑽を計る、或いは神社界の行事に参加し旧交を温める。または休暇をいただき帰省するなどリフレッシュする等にもあてられます▼勿論、秋からの繁忙期へ向けてじっくりと計画を練るのもこの時期で、しておかないと参拝者の皆様に宗像大神の御神徳をお受けいただけるようなことは出来ません▼先輩神職や同業者、業界（他の神社の神職や神社本庁）からの指標はまだまだ仰がねばなりませんが、ある程度の神道精神、神社らしさ、宗像大社らしさの基準はなんとなく掴めてきました▼その上で、異業種の方々にアイディアやお力をいただき共に作り上げると、思いもよらない素晴らしいものが出来上がることが多く「餅は餅屋」ということを最近強くかみ締めています▼夏をどう過ごすのか、異業種方々にどれだけアドバイスを求めるか、世間一般の感覚をどこまで受け入れられるのか、そして内部調整をどう図るのか、「決断と実現」がこの夏のテーマになりそうです。（塚）

発行所 宗像大社社務所 宗像会

〒811-3505 福岡県宗像市田島
電話 0940-62-1311（代）
発行人 葦津幹之
編集人 大塚宗延
制作 ゼネラルアサヒ
印刷 ゼネラルアサヒ

毎月1日発行 定価1年送料共1,000円